

例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理事業は、国（1,750,000円）、県（875,000円）の補助金を受け、平成2年5月8日から平成3年3月30日まで実施した。

3. 調査組織

調査主体者	大井町教育委員会
教育長	小林 茂吉
社会教育課長	吉田 和子
町史・文化財係長	多田 威
町史・文化財係	坪田 幹男・桜井 信枝・高崎 直成
発掘調査担当者	坪田 幹男・高崎 直成

4. 本書の執筆は調査担当者が下記のように分担した。

I・II-1・3・III・IV・VII・VIII・IX章：坪田、II-2・V・VI章：高崎。

遺構図版作成は小林登喜枝、土器実測図版作成は高崎があたり、土器拓影図作成には整理事業参加者全員の協力を得た。また本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。

5. 各遺跡の調査から報告書刊行に至るまで下記の諸氏、機関よりご指導、ご協力を賜った。

荒井幹夫、今井堯、内田賢司、神木繁嘉、小出輝雄、駒井和久、佐藤正志、笹森健一、谷井彪、塚田政子、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、和田晋治、
(敬称略)

埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合、亀久保特定土地区画整理組合、大井町遺跡調査会

6. 発掘調査ならびに整理事業参加者は下記の皆様である。銘記して、謝意を表したい。

(発掘調査参加者) 敬称略

会沢泉、浅野昭夫、新井唯二、飯塚泰子、石川与一、井坪志津子、井上晴江、内田信治、海老原サナエ、大曾根キク子、太田明代、奥村友子、遠田つる、笠原英子、金子君子、神木光治、木村美和子、小林こずい、佐久間ひろ子、佐藤至一、柴田しづ子、鈴木英子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、田村福次郎、中嶋末子、中島優子、並木宗次、野岡由紀子、野沢松代、林きぬ子、比嘉洋子、細谷清作、松木美恵子、山内栄美子、山下一枝、弓和子、若林紀美代

(整理事業参加者) 敬称略

石垣ゆき子、須藤さち子、柚木嘉図子、高橋けい子、中田藤子、中野和子

凡 例

1. 本書の図版の縮尺は、住居・土坑 $\frac{1}{60}$ ・炉 $\frac{1}{30}$ ・土器実測図 $\frac{1}{4}$ ・土器拓影図 $\frac{1}{3}$ とした。
2. 遺構図中の細数字は床面もしくは確認面からの深さ(cm)を示す。
3. 胎土粒子に関する各項の規準は次のように定めた。
小礫：2.0mm以上、粗砂：0.2～2mm、細砂：0.2mm以下。
4. 土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母末を含有する縄文土器を表わしている。

I 経緯

○ 調査に至る経緯

埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置する。かつては畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40～50年代にかけて人口で約22,000人、6,000戸が急増した。面積8kmで現在の人口は39,000人を超えている。昭和60年代以降は、大規模な土地区画整理事業が進められ、町内遺跡の約80%近くがその区域内に位置しているため、土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が町遺跡調査会により通年実施されてきている。町では、1978年以来国庫補助を受けて「町内東部遺跡群発掘調査事業」として民間の小規模開発に対処するため、埋蔵文化財の調査を実施してきた。遺跡の調査は、庁内関係各課と連絡調整をして行ってきた。農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設課から開発事前協議建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会は遺跡地図と照合のうえ現地踏査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響を及ぼすとみなされる工事主体者に連絡し、協議を行った。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったものである。平成2年度の調査は、下記の17箇所であった。民間及び公共事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査についても、国庫補助事業として対応した。

No.	遺 跡 地 点 名	所 在 地	開発面積	調査原因	調査期間
1	本村遺跡第12地点	大井町大字大井240,241～4	340㎡	個人住宅建設	2.5.8～5.9
2	亀居遺跡第20地点	〃 亀久保1,001-3	118㎡	個人住宅建設	5.21～5.25
3	江川南遺跡第2地点(試掘調査)	〃 東久保1丁目120-3	580㎡	集合住宅建設	5.28～5.31
4	西ノ原遺跡第43地点	〃 苗間153-3	272㎡	個人住宅建設	6.26～7.9
5	本村遺跡第13地点	〃 大井180	428㎡	個人住宅建設	7.25～7.26
6	東台遺跡第16地点(試掘調査)	〃 大井713-4,5	3,048㎡	資材置場設置	8.1～8.4
7	苗間東久保遺跡第16地点(試掘調査)	〃 苗間645-1	390㎡	集合住宅建設	8.21～8.24
8	亀居遺跡第23地点	〃 亀久保1,001-14,15	160㎡	個人住宅建設	9.3～9.10
9	東台遺跡第17地点(試掘調査)	〃 大井621-1	1,470㎡	診療所建設	9.5～9.12
10	小田久保遺跡第1地点(試掘調査)	〃 大井1,223-3	694㎡	資材置場設置	10.12～10.18
11	本村遺跡第16地点(試掘調査)	〃 大井110-2	230㎡	学童保育所設置	11.6～11.13
12	亀居遺跡第28地点	〃 亀久保995-6	475㎡	個人住宅建設	3.1.24～2.1
13	亀居遺跡第26地点	〃 亀久保1,001-14	259㎡	個人住宅建設	2.14～3.15
14	亀居遺跡第25地点	〃 亀久保995-7	162㎡	個人住宅建設	3.12～3.16
15	苗間東久保遺跡第17地点(試掘調査)	〃 苗間636-4	583㎡	駐車場設置	3.12～3.15
16	中沢前遺跡第2地点	〃 苗間221-3	1,333㎡	個人住宅建設	3.14～3.18
17	東台遺跡第18地点(試掘調査)	〃 大井588	20,000㎡	集合住宅建設	3.25～3.29

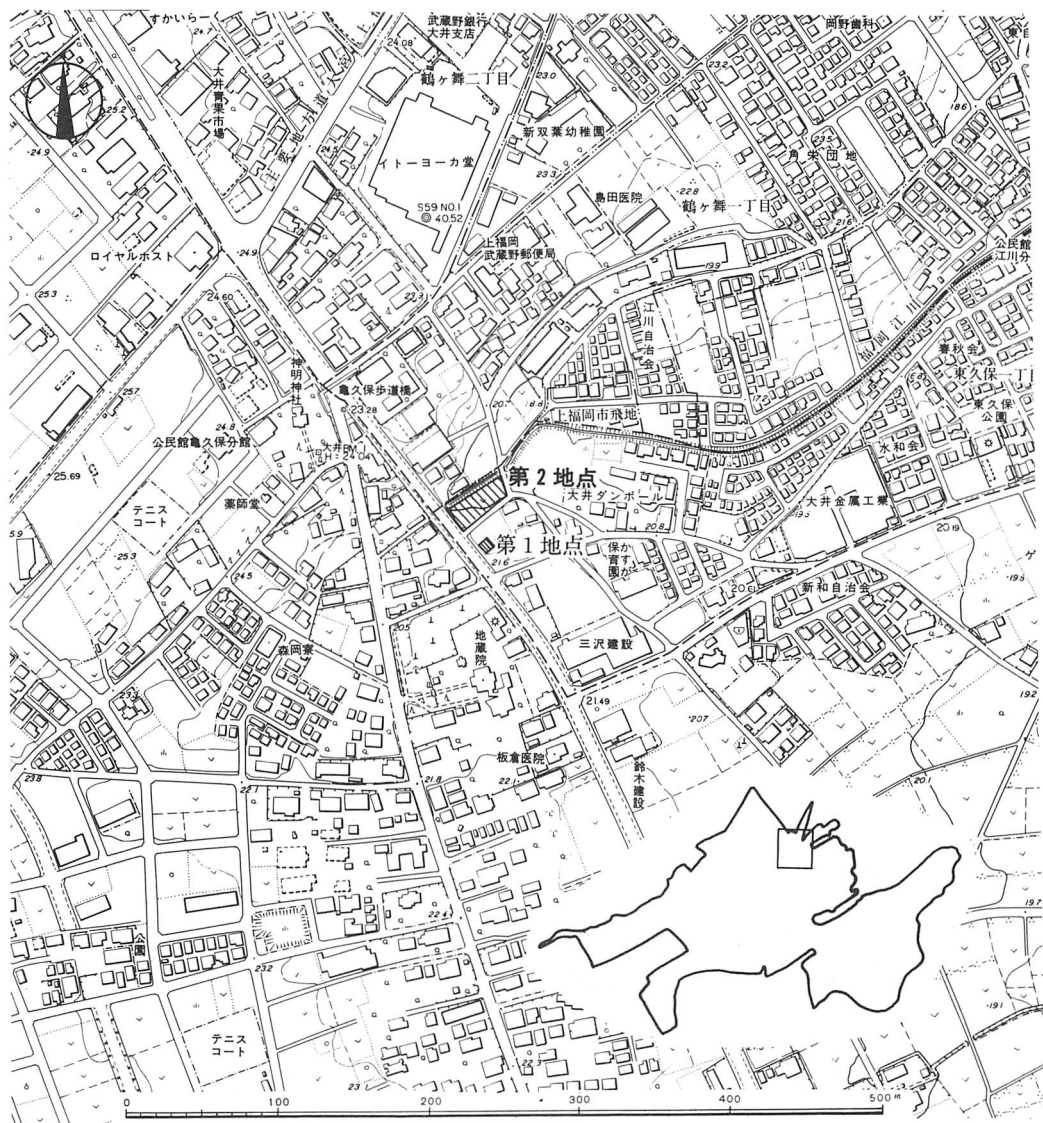
本報告では、時間の制約上No.12までにとどめたが、3.江川南遺跡第2地点、7.苗間東久保遺跡第16地点、9.東台遺跡第17地点、11.本村遺跡第16地点の本調査の概要を参考資料として巻末に掲載した。

Ⅲ 江川南遺跡第2地点（試掘調査）

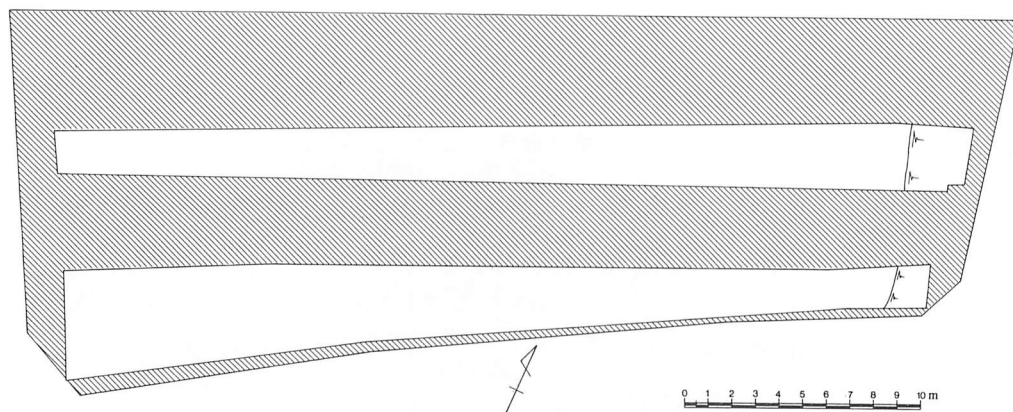
1. 立地と遺跡の環境

入間川の支流新河川に注ぐ福岡江川の南緩斜面上に位置し、縄文時代中期前半の亀居遺跡とは対岸に立地している。1977年9月に遺跡の中核部と思われる畑地を、町史編さん事業の一環として発掘調査し、新道期の炉体土器を伴う住居跡1軒が検出されている。また、表採ではあるがチャート製のナイフ形石器3点が出土し、旧石器時代の遺物も報告されている（注1）。

この地区の周辺は、急激な市街化によって大きく変貌し、畑地が点在している状況にある。今回の調査は、共同住宅建設の申請があったので、遺構の有無を確認するため試掘調査を実施。



第8図 江川南遺跡の地形と調査区 (1/5000)



第9図 江川南遺跡第2地点試掘区域図 ($\frac{1}{300}$)

2. 試掘調査の概要

調査は1991年5月28日、南東側土地境界杭を基準にして、第9図のとおり幅2m～3m、長さ38mのトレンチを2本設定した。さらに人力によって、表土を除去して掘り下げ、遺構の精査に努めた。ローム層まで浅い所で15cmで達した。その結果両トレンチの東端で落ちこみを確認した。この落ちこみが遺構かどうか、また深さを確認するため掘り下げたところ、堀状遺構であることが判明した。また遺構精査中、ゴボウのトレンチャー内より焼礫が出土したため、旧石器時代の礫群の存在の可能性もでてきたため、深掘区を設定し掘り進んだ。結果、比較的まとまったユニットが確認されたので6月1日より本調査に移った。(59ページ参照)

Ⅳ 苗間東久保遺跡第16地点（試掘調査）

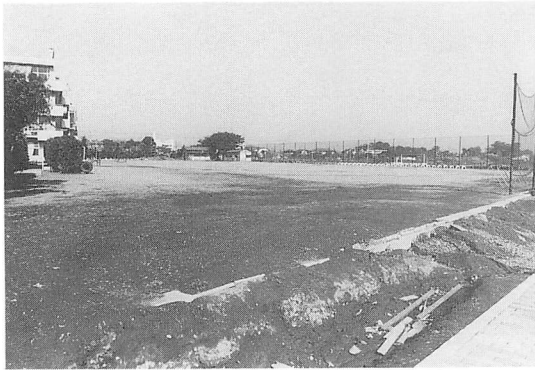
1. 遺跡の立地と調査の概要

苗間東久保遺跡は、さかい川に面した南側の低位台地上に立地。標高は高いところで11m、周辺部は9mを測る。これまでの調査によって、縄文時代早期後半～末葉、前期前半～後半、中期中葉～後半、後期前半の遺構が確認されている。現状は、市街化区域であるが畑地も比較的多くみられる。しかし遺跡はまさに蚕食的に、宅地造成等によって破壊されてきている。

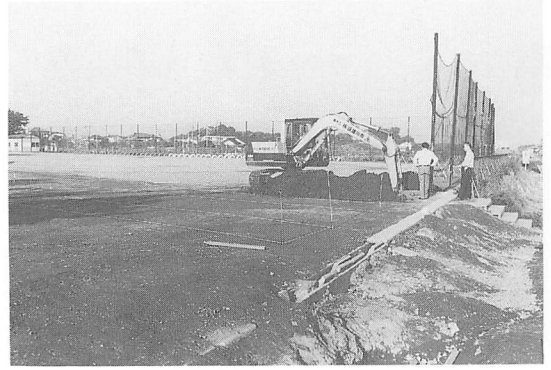
1990年7月19日、土地所有者から現状の駐車場に共同住宅を建設したい旨の開発行為事前協議書が提出された。現地を確認したところ、この地は南側斜面に移行するところで、過去に第10・11地点で発掘調査した地点の間にあたっており、遺跡範囲の境界と思われる。したがって、遺構の存在の確認が、第1の課題となった。そこで、遺構を確認するため試掘調査を実施することになった。調査は、1990年8月21日、駐車場表面の砂利層をすき取るため重機によって表土を除去し、さらに人力によって遺構確認のための精査をおこなった。深耕による攪乱が著しかったが、暗褐色の落ちこみが確認されたため、試掘調査と継続して、大井町遺跡調査会が発掘調査を実施することになった。本調査の費用は全額事業主が負担した。

図版 2

本村遺跡第16地点（試掘調査）



調査区近景



表土除去状況

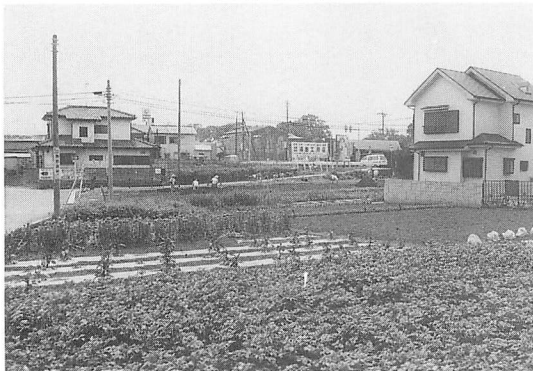


試掘調査風景



溝状遺構プラン

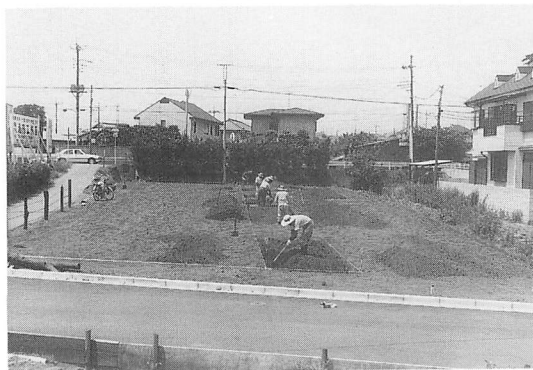
江川南遺跡第2地点（試掘調査）



調査区近景（南より）



調査区近景（東より）



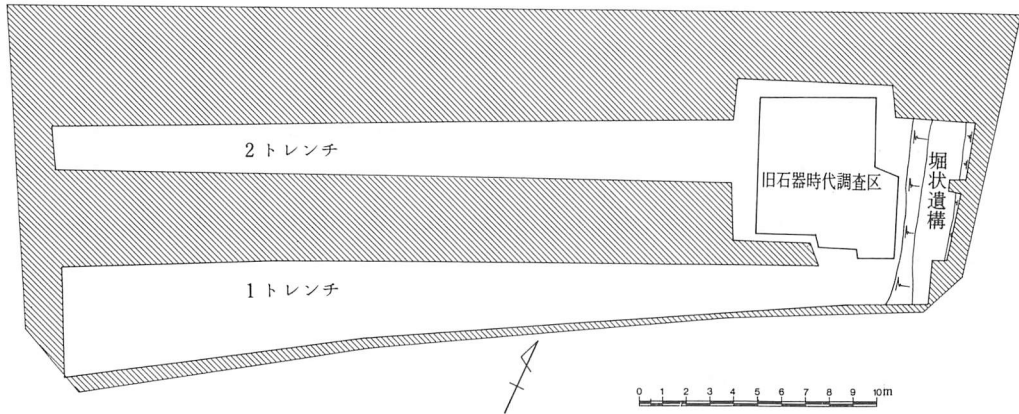
試掘調査風景



試掘調査風景

江川南遺跡第2地点（概報）

1. 発見された遺構と遺物の概要

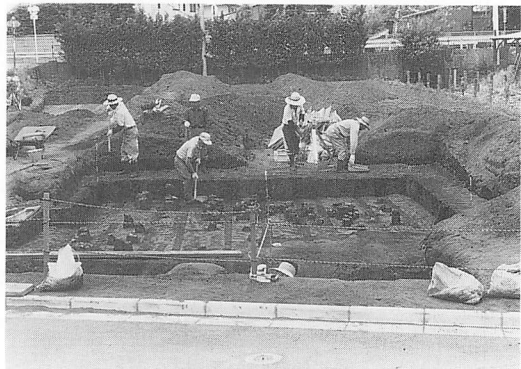
第1図 江川南遺跡第2地点調査区域図 ($\frac{1}{300}$)

試掘調査のため設定した2本のトレンチの東側区域で、旧石器時代の礫群3ヶ所と中・近世期の所産と思われる堀状の遺構が確認できたため、1990年6月1日より事業者負担による発掘調査を開始した。今調査において検出された遺跡・遺物の所属時期は旧石器時代と縄文時代、そして中・近世時代である。本遺跡は1977年に初めて行われた発掘調査（注1）から縄文時代中期前半の比較的保存状態の良好な遺跡であることが確認されていたが、今回はそれに関連する遺構の検出はなかった。ただ若干の該期土器が認められた。

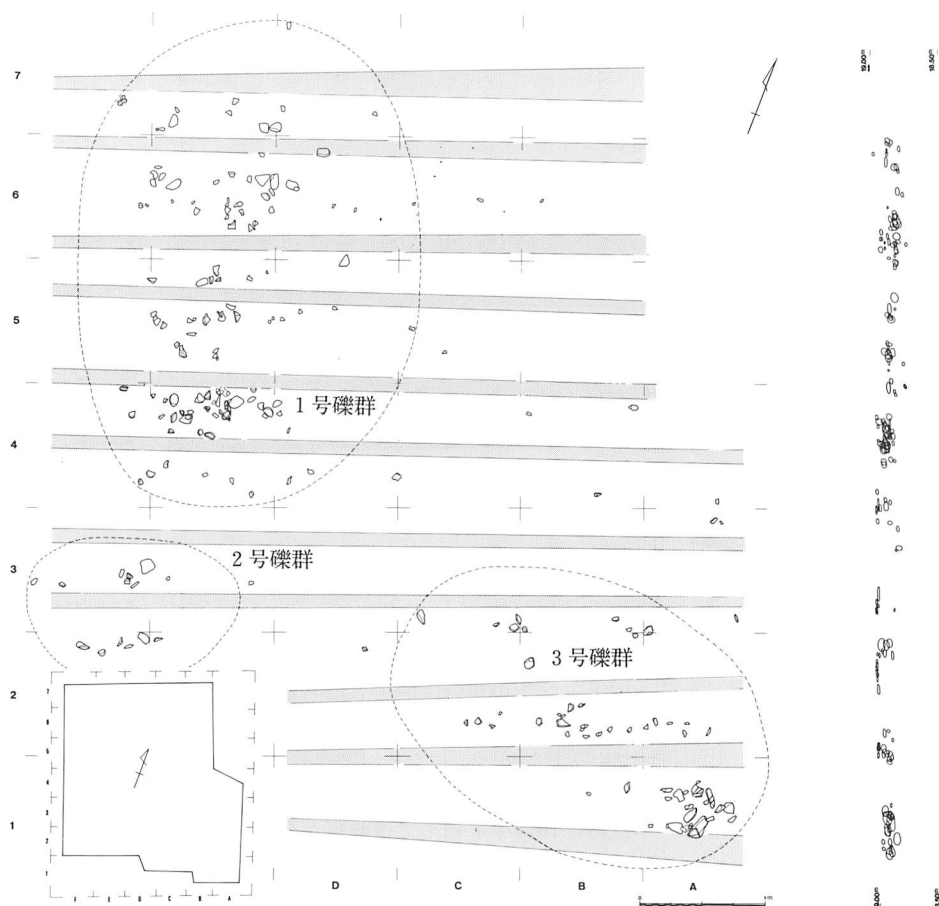
旧石器時代 礫群は大別して3ヶ所が確認された。石器が集中する箇所はなかった。出土石器及び礫群の接合関係、構成礫の法量等については、整理途次のため今報文には間にあわなかったため調査概報にとどめておきたい。3ヶ所の礫群は総計208個の礫により構成されている。礫群の断面観察によれば、礫底の最低レベルで18.73m、最高レベルで19.15mで42cmの間に礫群が確認された。特に18.85～19.00mのレベル間に集中度が著しかった。層位的には立川ローム層の第Ⅳ層に対比できる。礫群の底面は、自然地形の主脈に沿うように北東に向けてレベルが下がっている。

縄文時代 遺構は検出されなかった。遺物は土器、新道～藤内期と思われる破片25点。

中・近世時代 福岡江川に直交するようにほぼ南北に走る堀状遺構が一本検出された。遺物がないため時期は不明であるが、規模・形態等から当該期に所属すると思われる。



発掘調査風景



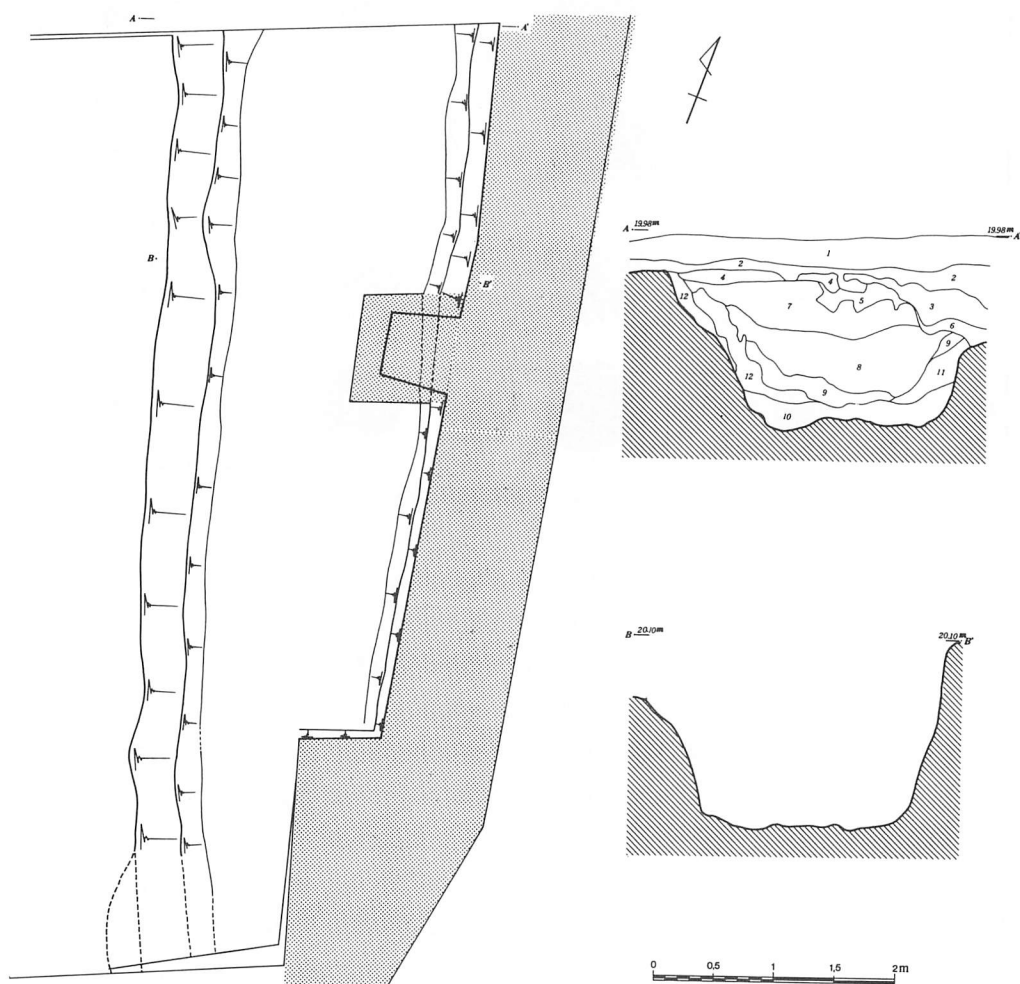
第2図 江川南遺跡第2地点礫群 (1/60)

2. 旧石器時代の礫群 3ヶ所で焼け礫が集積した状態で確認されたが、幅10cmで約40～50cm間隔で東西に直線状に入る深耕による攪乱で、礫群は寸断され少なくない礫が移動し試掘調査の際に確認され、今回の調査に致った。**1号礫群** 今調査中ではもっとも分布が広範囲に広がっていた。東西約200cm、南北300cmの長楕円状を呈し、礫は比較的大形の礫を配し、周辺部には礫が散漫に分布している。



旧石器時代の礫群

2ヶ所で礫が集中していた。**2号礫群** 1号礫群の南側延長上に位置し、1号礫群に包括も可能だが、全体的に2号礫群の方が礫底の標高が高い。東西110cm、南北90cmの楕円状を呈し、分布は散漫で小さなまとまりが2ヶ所見られる。**3号礫群** 大形の礫を配し、まとまりは比較的良好である。東西220cm、南北180cmの楕円状を呈し、特に東寄りでは完形礫が多く集中していた。

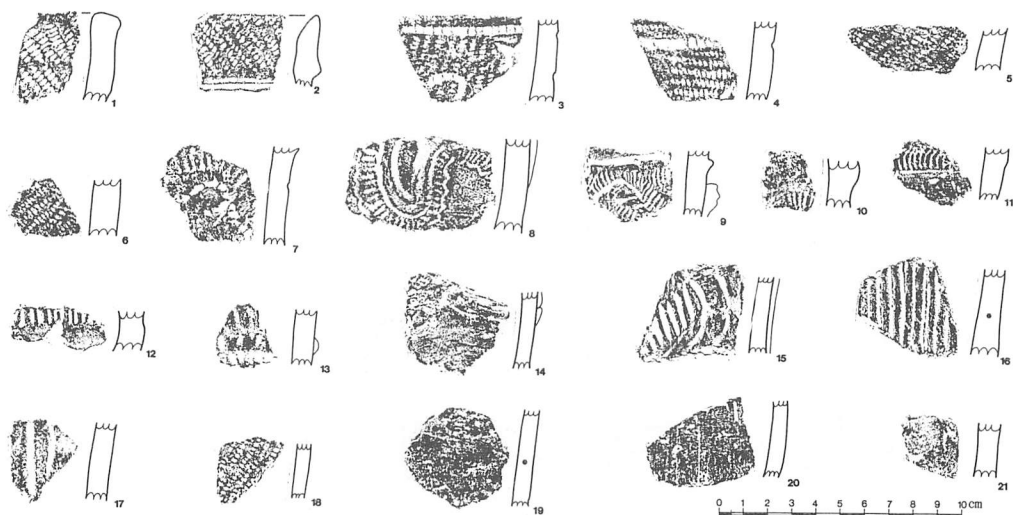


第3図 江川南遺跡第2地点堀状遺構 (1/60)

3. 堀状遺構 今調査区のもっとも東側から検出された。東の立ち上がりが区域外にかかっていたため全貌は明らかではないが、確認面での推定上幅は約3m、堀底幅が1.4m、確認面からの深さは1.3m。断面形は箱葉研形を呈する。覆土は7・8層が主体で、ローム粒子を含むたいへんしまりの強い黒褐色（7層）。8層は7層と土質は近似しているがやや暗い。9層はローム小ブロックを多量に含む暗褐色土、10は底面直上で、ロームブロックを多く含む褐色土、底面はやや起伏があるが、壁は直線的に一定の傾斜をもって立ちあがっている。堀底のレベルは南と北でその差55cmあり、北へおちている。



堀状遺構



第4図 江川南遺跡第2地点出土土器 (1/3)

出土土器（第4図） 第2地点からは土器小片・細片計25点が出土した。1・2は円筒形深鉢の口縁部。3～4は地文縄文で口縁直下に角押文を配する類で、3は角押文を円形に加える。5・6はこれらの縄文部片。7は区画隆帯ぞいに矢状押引文を配する。9・10は胴部下半部片で隆帯で芋虫状袖象文をつくる類で、瓜形文・結節沈線をほどこす。10～12は区画隆帯上に瓜形文を施す。14はクランク状懸垂文の基部。19は横長区画内に棒状工具による沈線列を配する。棒状工具による縦位の沈線列をもつ16と無文の20は胎土に金雲母を含む。全体として勝坂式（藤内期）が主体である。

まとめ 旧石器時代については初めての遺構確認となった。これまでに本遺跡では表採ではあるが石刃状縦長剥片を素材にし、二側縁加工の刃潰しと基部に入念な調整をおこなった3点のナイフ形石器が出土していたためその存在は確実視されてはいた。しかし、今調査区は福岡江川の右岸へりに位置し、遺跡内ではもっとも北に位置する標高の低い地区であったためローム層の検出も疑問をもって調査にのぞんだが、予想に反し沖積面はなく立川ローム層が急激に福岡江川でおちこむという地形になっていた。今回確認の礫群は、火を受けた自然礫が、単に集っただけの遺構であるが、旧石器時代の調理施設として旧石器文化の中に果す役割や意義については、これまでに礫群研究の中で既に明らかにされてきている。^(注2) 町内でも大小の礫群が発見されているが福岡江川水系での礫群確認は今調査が初めてである。次に中・近世期の堀状遺構についてであるが今調査区は南西方向50mの所にある地藏院の寺域の北東部に位置する。かねてより地藏院は南北朝期の二階堂氏との関係から、氏の館跡との想定もあり、今回確認された堀の規模・形態・方向等はいへん興味深い。最後に土地所有者の三沢佐五松氏には発掘調査への御理解・御協力をいただいた。記してお礼を申し上げる。^(注3) (坪田幹男)

注1 坪田幹男『江川南・西ノ原遺跡』大井町史編さん委員会

1980年

注2 古代学協会「先土器時代の礫群をめぐって」『古代文化』39

1987年

注3 松本新八郎「南北朝内乱と社会の変革」『大井町史 通史編上巻』

1989年